

島根県立松江農林高等学校3年 和田 鈴菜 さん

『私の思う介護の在り方』

私は高校生に入るまで、「介護」と聞くと食事や入浴、排泄など生活をする上での身体の介助をする事だと思っていた。高校に入学し、介護を専門的に学んでいく中で私の中の介護という概念が大きく変わった。私には認知症を患う祖母がいる。祖母の記憶の中では、私は中学三年生を生きている。しかし、私は今大学受験を控える高校3年生。祖母はいつも「高校受験頑張っね」と応援してくれる。その度に私は中学三年生に戻り祖母と会話をする。その時に私は思った。介護というのは、身体を支えることだけではなく、その人が生きている現実の中に入り込み、時間を共にすることだ。その人の思い描く世界を、現実に戻すのではなく、一緒に楽しむことなのではないのだろうか。祖母の記憶が、更新され続けなくなっても私は何度でも中学三年生に戻るだろう。祖母の記憶の中での私も、大学受験を控える高校三年生の私も笑って終われる結果になりますように。

【応募者コメント】祖母の応援が中学三年生の私に対しての応援だったとしても、大学受験を控える私にとってすごく背中を押してくれるような言葉で、祖母は私にとってとても心強い存在だなと感じました。